

千刈狸の呟き

～ 患者, 患者さん, 患者様, 患児ちゃん ～

(ボケ狸)

「高熱のあった患者さんに」、「患者さんも医療者も不安に」、「患者さんの痛みや」、「アトピーの患者さんで」... 先頃、新書版の医学啓蒙書を読んだところ、あまりに「患者さん」の連呼・連発が多く、辟易してしまった。30年ぐらい前までは、「患者さん」という言葉づかいはなく、単に「患者」と書くのが普通であったと思う。その後、「医師が『患者』と呼び捨てにするのはよくない。『患者さん』と言え」というような風潮となり、昨今は、「患者様」という医療関係者もいるようである。

ところで、いつでも「患者」と書かずに、「患者さん」と書くべきであろうか？ 前述の新書では、読んでいて、あまりの「患者さん」の多さに辟易したのであった。

通常、漢語（たとえば、警察官）にはさんづけせず、和語（おまわりさん）にはさんづけすることが多いという。この「患者さん」という言葉づかいは、最近の医療関係者特有のものであるようだ。

医療関係者以外の書いたものは？と見ると、この原稿を書く前に、目にした新聞、一般書では、「引きも切らぬ患者の中には..」（山田孝男：風知抄；毎日新聞 5/14/12）「死亡した患者の遺族...」（イレッサ訴訟を報じる記事；読売新聞 5/26/12）「患者からよく話を聞く... 患者との対話能力向上のため..」（読売新聞 5/29/12）「患者はしだいにぜいたくになり...」（外山滋比古：傷のあるリンゴ；東京書籍、2012）と「さん」づけのものはなかったのである。

この「さん」であるが、国語辞典(1)によると、さん[接尾]（人を表わす語や団体名などに付いて）軽い尊敬や親しみの気持を表す。

* 「さま」の転。「さま」よりも敬意が軽く、親しみのある言い方... とのことであった。

ついでに、患者と病人の違いを調べてみると(2)、かんじゃ[患者] 病人をさして、病院や医師の側から呼ぶ漢語で会話でも文章でも使われる。〈入院患者を抱える〉、〈患者を預かる〉、〈待合室に患者があふれる〉、「附属病院の入院患者が寝着のままスリッパをはき」（大江健三郎：死者の奢り） 医院や病院に診察を受けに行くまでの間は、病人であつても患者とは呼ばれない。

びょうにん[病人] 病気になった人の意で、くだけた会話から硬い文章まで幅広く使われる日常

の漢語。〈病人を見舞う〉、〈病人の看護〉。病院に行けば「患者」ともいえる... とのことであった。

「病院や医師の側から呼ぶ言葉」であれば、さんをつけようが、つけまいが「病院や医師の側の勝手？」かというところは簡単ではなさそうである。

日本語には話し言葉と書き言葉があり、話された言葉をそのまま活字にすると非常に読み（わかり）にくくなる。また、それ以前に、ヤマト言葉系の「相手はウチの存在かソトの存在か」を意識し、漢語系の「相手を自分の上の存在と扱うか下とみるか」の観点を含め、「その認識を言葉の使い方の上に具体化する仕方、それが日本語の敬語の体系」であり、「その人間関係のとらえ方に、はっきりと反応し適応しないと、即座にあの人は常識がない」ということになるという(3)。

したがって、「安易に敬語表現をしさえすれば、人権を尊重していると思ひ込む風潮がありますが、とんでもない心得違い」(4) というわけである。

つまり、心情の移入なしに“事実”を伝えることを基本とする場合(4) 妙な敬語表現をすべきではないというのである。「新聞・雑誌の記事、学術論文などで、ていねい語を使わない。学術論文で人名に敬称をつけない。敬称を使わない現象は、スポーツ放送などの選手名の呼びすてにも見られる」ような文化的習慣がある、という(5)。

その一方、外向きことばというのがあり、「だれだかわからない個人（またはその集団）を相手にし、しかもそれに経済上の利害関係が伴ったりして、良好なコミュニケーションを維持しなければならない場合」複雑な言葉づかいとなり、「商業上のことばづかいにおける敬語の使用が、その一典型」であり、「店員のことばに.. 敬語過剰による誤用が起きるのも、その一つの現れかも」というのである(5)。

医師が患者に向き合うよりも、パソコンを向く時間が長くなるに従い、「患者さん」、「患者様」と丁寧語が多く使われるようになったのでなければ幸いである。

参考文献

1. 北原保雄編：明鏡国語辞典；大修館書店、2003
2. 中村明：日本語 語感の辞典；岩波書店、2010
3. 大野晋：日本語練習帳、岩波文庫1999
4. 奥秋義信：残念な日本語、毎日新聞社、2011
5. 南 不二男：敬語、岩波新書1987